



北九州学術研究都市(以下、「学研都市」)の開設10周年にあたり、歴代の(財)北九州産業学術推進機構(FAIS)理事長による座談会を、平成23年5月12日(木)に日本工業倶楽部(東京都千代田区丸の内1-4-6)で開催した。

進行役に北九州市とも縁の深いノンフィクション作家の山根一眞氏を迎えて、歴代理事長がこれまでの出来事を振り返るとともに、学研都市の現在、さらに未来像について語り合った。

## 財団法人北九州産業学術推進機構 歴代理事長座談会



【初代理事長】  
有馬 朗人

プロフィール／昭和5年大阪府生まれ。東京大学理学部物理学科卒業。東京大学総長、理化学研究所理事長、文部大臣、科学技術庁長官、財団法人北九州産業学術推進機構理事長などを歴任。現在、武蔵学園長、静岡文化芸術大学理事長、国際俳句交流協会会長など。文化功労者、旭日大綬章、文化勲章受章。



【第2代理事長】  
阿南 惟正

プロフィール／昭和8年東京都生まれ。東京大学法学部政治学科卒業。新日本製鐵株式会社代表取締役副社長、太平工業株式会社代表取締役社長、同代表取締役会長、同特別顧問、財団法人北九州産業学術推進機構理事長、北九州市立大学理事長などを歴任。現在、北九州市顧問。



【現理事長】  
國武 豊喜

プロフィール／昭和11年福岡県生まれ。ペンシルバニア大学大学院化学専攻博士課程修了。カリフォルニア工科大学博士研究員、九州大学工学部教授、同工学部長、北九州市立大学副学長などを歴任。現在、株式会社ナノメンブレン取締役最高技術責任者、財団法人北九州産業学術推進機構理事長など。紫綬褒章受章、文化功労者。



【進行役】  
山根 一眞

プロフィール／昭和22年東京都生まれ。ノンフィクション作家。獨協大学外国語学部ドイツ語学科卒業。現在、獨協大学経済学部特任教授、宇宙航空研究開発機構(JAXA)嘱託、福井県文化顧問、月探査に関する懇談会委員(内閣府)、生物多様性戦略検討会委員(農林水産省)、北九州マイスター選考委員など。

## 学研都市構想づくり

### 国・公・私立大学を一つのキャンパスに

**山根:** そうそうたる3人の先生方を目の前に大変緊張しております。これまで北九州市へは100回は訪れていきますので、もうほとんど故郷ですから、とても楽しみにして来ました。学研都市は、計画段階から何度も現場を見せていただいてきましたが、日本中、どこにもあんなところはないですね。本当に見事な学術研究都市をつくったなと思っています。北九州市は日本4大工業地帯の一つですが、「鉄冷え」という時代の変節を迎えつつあった時に、それをよみがえらせるために、いや、これまでどこにもなかった、そして次の時代を担う新しい工業都市を創造するため、そのコアになる「知の溶鉱炉」という理想を掲げたわけです。これは、何とも大胆な挑戦でした。その「大胆」な挑戦は、有馬先生の構想によると伺っておりますが……。

**有馬:** そんなことはありません(笑)。

**山根:** いや、有馬先生の哲学、思想なしには、こうはならなかったのでは？

**有馬:** もともと私が主宰する天為俳句会の仲間である第19代文化庁長官(平成21年7月～22年7月)だった玉井日出夫君は、北九州市に出向して北九州市の教育長を務めていた時代があるんです。つまり、北九州市は文部科学省、当時の文部省と非常に縁があったんですね。私が学研都市の構想にかかわったのは、そういう縁によるんです。

**山根:** 北九州市は頭のいい人が多いのかな？

**有馬:** 九州の人は頭いいんだ(笑)。それで、玉井君が霞ヶ関から北九州市に出向し教育長に就き、北九州市



の教育および大学を何とかしようと考え、慶應義塾大学塾長の石川忠雄さんを引っ張り出したんです。私が東京大学の総長の時代です(平成元年～5年)。その後、石川さんのお手伝いというかたちで学研都市の最初の構想委員会である「北九州新大学設立検討委員会」の委員に加わった。そして、石川さんがお辞めになったあと、私が委員長に就任したことから話は始まるわけです。新大学構想の基本理念は、産学官が一体になるということです。そして、国・公・私立大学もまとめ。国立大学だけならやりやすいが、私学も入れようと。いくつかの私学に声を掛けて、結局、早稲田大学が入ってくださったんです。公立はもちろん、北九州市立大学が入ります。

**山根:** 国・公・私立大学をまとめてしまうなんて、何とも無謀。誰も考え付かないですよ。どうしてそういう発想が？

**有馬:** 今は少し考えが変わっていますが、平成12年以前は国立大学より私立大学の方が進んでいたということがあります。例えば、早稲田大学や慶應義塾大学、立命館大学は進化した大学のありようを次々に打ち出していた。立命館の総長や慶應義塾の石川さん(石川忠雄塾長・昭和52年～平成5年)、早稲田大学の西原さん(西原春夫総長・昭和57年～平成2年)と話をし、東大などの国立大学の総長や学長よりはるかに高い見識を持っておられることを知りました。これは、国立大学も私立大学のいい影響を受け取らないといかんぞと。それに、当時、大学の先生はまだ教授会が大好きでね、教授会だけでもものを判断しているから「タコ壺だ」と私は言っていたんです。そのタコ壺教授会の改善のためには、国・公・私立のタコ壺を一つに集めれば、少しはましになるだろうと(笑)。「そのためにどうすればいいか？」と問われたので、「簡単だ、図書館は一つにせよ、食堂は一つにせよ、会議もできる限り一つにせよ、教授会は別々にやるな、一緒にやれ」と。そして、一部は実現できたんです。

### 「鉄冷え」から再び「ものづくり」のまちへ

**山根:** 阿南さんは、学研都市の母体、財団法人北九州産業学術推進機構(FAIS)の第2代理事長への就任が

決まった時には、当然、「鉄の町＝北九州市」の歴史、そして今後のことが頭をよぎったのでは？

**阿南:** ええ、長年にわたり新日本製鐵におりましたから。

**山根:** 北九州市としては、八幡製鐵所の変化を受けとめ、活力を落とさず、より活性化した都市づくりをしなくてはと考えるのは当然で、そこがこの学研都市構想の原点だったと思います。阿南さん、これはやれるぞと感じましたか？

**阿南:** やれる、やれないというよりも、むしろ市長がそれだけの決断をしたんですから、何としても軌道に乗せてはと。北九州市は私が社会人の苗の時代から育てていただいたところですから、何か恩返しをしなきゃいけないという気持ちもありました。北九州市は、かつては大変な公害に見舞われていた。北九州市は、その公害を克服して世界一の環境都市を目指してきたわけです。学研都市は、その「環境」、そして「情報」を中心にして設立すると聞いて、やりがいを感じるとともに、宿命的なものを感じましたね。かつて新日鐵の真ん中にいて、公害発生源として責められていた当事者でもありますから。私は大学運営については素人でしたが、國武先生という心強い援軍がありましたので、いろいろとお話を聞きながら、どう進めていくかを考えればいい。さらに、有馬先生を中心に見事な構想をつくっていただいたこと、末吉さん（末吉興一前北九州市長・昭和62年～平成19年）が大きな信念を持っておられるので予算も確保できる。これは大変なものを引き受けたなという感じはありましたがね。

**山根:** 強靱な縦糸と、どこまでも伸びる横糸が与えられたという感じですかね。その縦糸と横糸で、どう未来を織り上げていくかが問われていた？

**阿南:** ひとことと言えば、お互いに分かり合う共通の目標を、どう積極的に実現するかです。3大学の責任者の先生方が非常に立派で、自分の世界を守ることより共通の目標の実現に向かって下さった。

**山根:** 3大学で中心だった先生方とは？

**阿南:** 北九州市立大学は國武先生と後の国際環境工学部長の高橋進一先生(故人)、早稲田大学は秋月影雄先生(現・名誉教授)、九州工業大学は石川眞澄先生(現・理事、副学長)が核となる先生方でした。私もだい

ぶ話し合いの場に参加しましたがけれども、非常に意思疎通が早かったですね。ここで意志や目的でぶつかったら前に進みませんでした。

**山根:** 「タコ壺のタコ」ではない、「壺なしタコ」が絡み合って一つになった(笑)。非常にいいスタートですね。

## 土地を確保し段階的に整備

**山根:** 國武先生がこの学研都市構想にかかわられたのはいつからですか？

**國武:** 平成5年、慶應義塾長の石川忠雄さんを座長に迎えて新大学構想策定委員会が発足した時からです。当時、私は九州大学の工学部長でしたが、地元、福岡県のメンバーを一人構想委員会に加えようということで、招かれたんだと思います。

**山根:** すぐに、「これは面白い挑戦だ!」と？

**國武:** いえ、当初の構想段階では半信半疑でした。北九州新大学構想推進委員会の委員長に有馬先生が就任され発足したのは平成9年で、それ以降、学研都市の構想の具体的な姿がだんだんと見えてきたんですが、そんな素晴らしいものが本当にできるんだろうかと……。

**山根:** でも、ああいう大胆な構想を伺うと元気が出ますよね。これはやってみる価値があるぞ、と？

**國武:** そうですね。将来こうあるべきだということが分かりますからね。

**阿南:** 北九州市が有馬先生のサゼスションも得て学研都市を実行に移したのは、私は蛮勇と言ってもいい決断だったと思いますね。

**有馬:** 何と言っても、成功の一番の理由は、北九州市が熱心だったことですよ。もう一つは土地がありましたね。335ヘクタールと広い。あれがいい土地でした。

**山根:** 私が驚いたのは、建設が早かったことです。市長からこの構想を伺ったのは平成7年ですが、あっという間にキャンパスができて、オープンを迎えた。

**阿南:** 私は出来上がりかけた時からしか知らないんですが、なにしろ土地の買収から建設までそんなに長い期間ではないから、相当精力的にやったと思います。

**國武:** 最初から住宅・都市整備公団(現・UR都市機構)が入ったんですが、同公団の区画整理事業の中で最もスピードが速い区画整理事業だったということです。

## 産学連携への仕組みづくり

**山根:**学研都市のビジョンの中心は、北九州市に「産学官共同」の基盤をつくることですが、阿南さんはこれについては期待されましたか？

**阿南:**当時、私はまだ産学官連携については「いろは」を学んだくらいでしたが、皆さんと話しているうちに、産学官のつなぎ役がやっぱり必要なんだと、自分の役割が少し分かってきました。

**山根:**「つなぎ役」は絶対に大事です。とはいうものの、阿南さん、例えば、新日鐵の八幡製鐵所には大きな研究予算が投じられている研究所があります。その研究所は、ある意味では「学」です。そういう大企業の立場では、学研都市が目指す「産学連携」は必要ない、ということはないんですか？

**阿南:**そういうことはありませんね。新日鐵八幡製鐵所の研究部門は、次第に君津地区に統合する流れが始まっていたから、八幡製鐵所の研究機能は昔に比べればだいぶ落ちていました。

**山根:**なるほど。おっしゃるような研究部門の環境の変化が多くの企業で起こっているとすれば、北九州市の学研都市のような新しい研究組織の役割は、これからますます大きくなる。新日鐵のありようが、それを物語っているんでしょうか？

**阿南:**国際化が進んできたために、国際競争に勝つためにどうするかを考えた取り組み、集約化や合理化を進めてきたわけです。八幡製鐵所も当然、その流れの中で新たな道を進めていますが、学研都市の存在は心強いものだと思います。

**山根:**國武先生、ここが新しい産業をつくっていく「知の溶鉱炉」になるという具体的なイメージは抱いていらっしゃいましたか？

**國武:**「知」は研究開発の基礎です。知的な人的資源を厚くしないといけないという意識は、市にもありましたし、私どもも感じていました。北九州市には九州工業大学など優れた知の拠点がありますが、それでも百万都市としてはまだ足りないという意識はありましたね。その九州工業大学は国立大学ですから、国の方針で運営されている。学研都市に、北九州市立大学国際環境工

学部が設立されたことの意味は、北九州市の政策を押し進めていくための「知の拠点」にしたいという意識、使命が最初からあったことを物語っていると思います。

**山根:**北九州市には実に多種多様の企業があります。新日鐵、TOTO、住友金属小倉、安川電機、シャボン玉石けん、ゼンリン……。製鉄、ロボット、自動車、陶器、地図情報、石けんまでじつにさまざまな技術がある。学研都市の設立に当たっては、そういう企業の皆さんの賛同や協力が必要だったと思いますが、その作業も大変だったのでは？

**阿南:**それは、かなりいろんな形でやったつもりです。ただ、そういう大企業もさることながら、私は中小企業という言い方はあまり好きじゃないんですけれども、地場のそういう中規模の企業にやっぱり理解してもらわないと、地域には根付かないなという意識がありましたね。

**山根:**企業の手応えについて國武先生は？

**國武:**皆さん、地元企業という意識は強いですね。公害問題をくぐり抜けてきた経験も大きいと思います。ネガティブなことではあったが、それを通して大きなつながりが培われてきたんだと思います。先ほど山根さんから名前が出た企業の多くは世界企業です。つまり、必ずしも地元だけを見ているというわけではない。ですから、比較的規模の小さい、地元に着している企業とのつながりが具体的には非常に大事でしたね。

## 「環境」と「情報」を柱にした知的クラスター

**山根:**学研都市が文科省の「知的クラスター創成事業」(註)の実施地域に選定されたのも、いきなりではなく、今までお話いただいたような流れがあったんですね。

**有馬:**そうです。そこにもう一つ良かったのは、平成13年の中央省庁再編によって旧文部省と旧科学技術庁が統合されて文部科学省が誕生したことです。「知的クラスター創成事業」には、かなり科学技術が入ってくる。文部省も科学技術庁と一緒にしたことによって、科学技術に対する教育に熱心になりました。科学研究費が増えたのも、科学技術庁が非常に協力してくれたという面があるんです。

**山根:**なるほど。ある意味では歴史の偶然ではあるけれども、学研都市にプラスに働いたんですね。「知的クラ